公文式学習法

一斉授業とは違う、一人ひとりの子どもの
「能力に応じた学習」で、学年を越えて進んでいきます。

個人別・能力別学習とは？

一人ひとりの子どもの 「能力に応じた学習」 を行う。
それが公文式の個人別・能力別の学習法です。

子ども（学習者）の能力は、それぞれの素質やそれまで
の環境によって一人ひとり違います。年齢が同じという
だけで学習内容を統一すれば、ある子にとっては難しすぎて自信を失わせたり、他の子にとっては簡単すぎて退屈だというようなことがどうしても起こってきます。学習を始めるにあたっては、一人ひとりのその時点の能力に応じた内容を与えなければならないのです。

公文式では、学習を始める時点での一人ひとりの学力はもちろん、学習開始後のそれぞれの習熟度に応じて学習を進めていきます

「ちょうどの学習」で学ぶ楽しさ、できる喜びを

公文式では、確実に 100 点を取れる段階の教材から出発し、常に自分の力にあった教材を自分のペースで解き進めることで、学ぶ楽しさとできる喜びを育みながら学力を高めます。これを公文式では「ちょうどの学習」と呼んでいます。

この、それぞれの子どもに「ちょうどの学習」により、年齢別による一斉授業の同一カリキュラムでは飽き足りない子も、学力不足で授業についていけない子も自らの能力を最大限に伸ばしていくことができるのです。

学年や年齢にはとらわれず、学年を越えて進む

公文式教室で学ぶ子どもたちは、年齢や学年にこだわることなく、自分の力でらくにできるところからスタートし、その子一人ひとりのペースで進んでいきます。 ですから小学5年生でも6年生でも、あるいは中学生でも、必要と判断すれば、たし算から学習を始めますし、逆に小学生だからという理由だけで、方程式以上の数学の内容を学習しては駄目などと足踏みさせることもしません。

自分の今の学年相当より下のらくにできるところから学習を始めた子どもたちも、しばらくすると学年相当のところに追いつき、その後は学年を越えて、学校ではまだ習っていない未知の内容を自分の力で進んでいくようになります。

そして2学年、3学年分先へ進んでくると、子どもは学力ばかりでなく自主性、積極性がつき、挑戦力など他の能力においても、めざましい進歩を見せるようになります。

自らすすんで学ぶ姿勢を身につけ、
自らの力で人生を切り拓いていける子どもに。

自習が中心の学習法で、自ら学ぶ力を養う

解き方や答えを「教えてもらう」という受け身の姿勢ではなく、自分の力で課題に取り組もうとする姿勢があってこそ学習意欲が芽生え、さらに先に進もうとする向上心が生まれます。公文式では、このような子どもたちの「自ら学ぶ力」を大切にしています。

公文式では、学校のような一斉授業は行いません。教わるのではなく、一人ひとりが自分に与えられた教材を自分で考え、解き進んでいく「自学自習」の学習形式をとっています。

公文式の「自学自習」形式の学習では、「ちょうど」のところを一気に解くことで集中力をつけ、「できた！」という達成感を味わいながら、次へ次へとより高いレベルの内容を学習していきます。つまずいたところや時間がかかりす

ぎたところは、必要に応じて十分な練習をして、学力を定着させながら進んでいきます。

習っていないところまで自学自習が可能な理由

公文式の教材は、常に一人ひとりにあった「ちょうどの学習」ができ、次のステップに挑戦する意欲を育てるために、やさしい問題から高度な問題へ非常にきめ細やかな「スモールステップ」で構成されています。

また、どんなときも自分で解き進むことができるよう、教材の導入部など必要な箇所には例題や適切な解説を設けるなど、上の段階へスムーズに進んでいけるための工夫もそのひとつです。

公文式教室の指導者は、子ども自身が自ら「気づいて」いけるようになることを大切にしています。ですから、問題の解き方や答えをすぐに教えることはありません。一人ひとりの「ちょうどの学習」で、自ら課題に取り組み、答えを自分で導き出していけるようにサポートします。問題を解くのは、あくまで子どもたち自身の力なのです。

自分の可能性を自らの力で追求していける子どもに

公文式では、できるだけ早く学校で習っているところより先の段階に、自学自習で進んでいくように導き、小学校・中学校のうちになるべく早く高校教材に進むことを目標にしています。これは、学年を越えたところを自習していくことを通じて学力に十分な余裕をもたせ、その余裕と自信によって自分の可能性を自らの力で追求していってほしいからです。

自ら積極的に学んでいく力は、やがて自分の夢や目標にチャレンジする力になっていきます。公文式で学んだ子どもたち一人ひとりが、自身の生きる道を自らの力で切り拓いていける人材として成長していくことこそ、公文式の願いです。

自分で学べるスモールステップの教材は、
今日も絶えまなく進化を続けています。

教材はスモールステップで綿密に構成

公文式教材は、高校で学習する内容を目指して一人ひとりが無理なくスムーズに学習を進めていけるよう、すべての教材がやさしい問題から高度な問題へ、非常にきめ細かな「スモールステップ」で構成されています。

たとえば算数・数学教材の場合は、計 5,520 枚（2011 年 7 月現在）。数をかぞえる練習のレベルから高校数学を超えるレベルまで、スモールステップで緻密に構成されています。ですから、どの子も自分にとってのちょうどの教材があり、着実に少しずつステップアップしていくことができるのです。

子どもたちから学びながら教材を改訂

これらの公文式の教材は、初めから全部がそろっていたわけではありません。原型は、公文式の創始者・公文公が息子のためにつくった 800 枚余りの教材でした。

それから現在にいたるまで、子どもたちが「それぞれ問題をどう解いたか」「どこでまちがえたか」など、常に学習過程を分析し、多くの子どもがつまずく箇所があれば、教室現場の声や指導者からの報告をもとに内容を随時検討して、教材そのものをより自学自習で進んでいきやすいように改善してきました。

学習者である子どもたちから学んで教材をより良いものへと進化させていく姿勢は、現在も、そしてこれからも、公文式の大切なこととして引き継がれていきます。

子ども一人ひとりの可能性を引き出す存在。
それが公文式の指導者です。

教えるのではなく「自分でできた！」に導く

公文式は自習形式のプリント教材を子ども自身が自分
の力で一つひとつ解き進めていく学習法ですが、ひとり
では「できない」「わからない」という場合もあります。

そういうとき公文式教室の指導者は、問題の解き方や答えをすぐに教えるのではなく、その子がどこまで理解できているか、どの段階までの学力が定着しているかを確認します。そのうえで、ヒントを与えたり、例題やすでに勉強した類題を示すことにより、自力で解答できるように指導します。

手とり足とり教えるのではなく、子ども自身に自分の力で気づかせるように導くのは、「自分の力で解けた！」という喜びを味わって、自分で課題を克服していこうとする姿勢を身につけてほしいからです。

一人ひとりの可能性を引き出す

子どもたちが自分の力で伸びていくために、「その子のできること」を見つけて、可能性を引き出す存在、それが公文式教室の指導者です。

公文式教室の指導者やスタッフは、子どもたち一人ひとりとしっかりと向き合い、その子の学力や個性・気持ちをきちんと把握したうえで、「ちょうどの学習」ができるようサポートを行います。そして、ほかの誰かと比較するのではなく、その子自身の成長を認め、ほめ、励ましていきます。さらには保護者の方の相談にのり、一緒になって子どもを見守っていきます。これが公文式指導者の役割です。

この指導者の存在があるからこそ、公文式は効果を発揮することができるのです。

http://www.kumongroup.com/world/index.html?ID=method_index04